

## Destiny ~ニダニム〜(Love letter)

みやもと なおみ  
宮本直美

南向きの窓から見える景色には、のんびり草を食む親子の馬の姿がある。馬産地では当たり前前の景色だが、何年たってもこの景色には癒される。その窓のそばにあるパソコンの横に、たった一枚だけ馬の写真が飾つてある。馬産地に暮らし、馬の仕事をしている私は、今まで馬の写真を飾ることはなかった。一頭だけ虫真しているように思えたからだ。でもたった一頭の馬だけ飾ることになったのは、その馬への想いをこれから先忘れてはいけないと強く思ったから。写真に納まった馬は「ワコーチカコ」。縁あって彼女の最後の数年をともに過ごした。出会って二十二年、こんな奇跡で繋がらなかつたらきっと無念だけが残ったかもしれない。

二十年以上前になる。馬の姿と風景に惹かれ日高を訪れるようになった私は、確か二回目の日高巡りだったと思う。新冠にあった旧CBスタッドを見学することにした。三十路に入った独身女が種馬を見てニヤニヤしているなんていうのは今でいうところの「キモイ女」なんだろうが、当時の私は馬を見ることが楽しみのおタク系女子。鼻歌まじりで牧柵沿いを歩いているとピカピカの鹿毛の馬がジロリと私を見た。馬を怖いなんて一度も思ったことなどないがその馬に睨まれた

アに出会って二年しかたっていない。会ったのもたった三回だ。でも、彼の立ち姿は今でもはっきりと覚えている。彼の面影を探しながら子供たちを応援しよう。ずっとずっと。墓前で私は誓った。リヴリアに届け最後のラブレターだと思つて。

リヴリアの死から十年後、私は日高で小さな牧場をはじめた。引退した馬たちが最期の時を過ごす終の棲家だ。種牡馬や繁殖の役目を終えた馬たちが穏やかに過ごせる場所、馬たちのケアホームを作った。かつて競馬を盛り上げた馬たちが老齢馬となり、草を食みながらのんびり過ごしている。そんな馬たちの姿にリヴリアの姿を重ねてみる。いつか、リヴリアの仔がここで暮らせたらどんなに良いだろうと思つてはみたが、少ない産駒の中でそうそう巡り会うことはないのだからな。と諦めていた。探すことも出会うこともなく私は目の前の仕事に追われリヴリアのこともいつしか過去形になっていった。牧場をはじめて九年が過ぎた。四頭の馬たちを天国に送り、牧場も少し余裕が出てきた。牝馬は基本的に相棒がいないと寂しがつて弱る傾向がある。牧場に一頭だけいる牝馬のことが気がかりだった。まもなく三十歳になるその牝馬は気が強く若馬とはあまりうまくいかない。年の近い高齢馬の仲間が良いのだが、なかなか牝馬はみつからない。伝手を使つて探してみるも良い返事がもらえず相棒探しは難航した。引退し余生を過ごす馬たちを調べていく中に「ワコーチカコ」の名を見つけた。その時、忘れていたリヴリアへの想いが蘇った。「リヴリアが残した産駒を一頭でもいい、看取つてあげたい」。ダメなことでは承知でワコーチカコが暮らす牧場へ電話をかけてみる。今思えば無謀なことだけどその時は気持ちが先走ってしまったのだ。「静内のローリングエッグスクラブの宮本と申します。突然のお電話を失礼いたします」。快く電話での相談に応じてくださったのはという牧場

瞬間背中がざわつとした。とっても鋭い目のその馬はゆつくりと近づき私の目の前で立ち止まった。何か言いたげな表情でジッと睨みつける。怖くてその場を離れたいの金縛りにあったように動けなかった。どれくらいの時間が過ぎたのかわからないが、馬が草を食べ始めるまで私はその馬から視線をそらすことすら出来なかつたのだ。ゆつくりと呼吸をし、その馬のネームプレートを見た。「リヴリア」内国産馬が大好きだった私には正直あまり興味のわかないアメリカ産の輸入種牡馬。でも、なぜかあのギラギラとしたまなざしが頭から離れなかつた。その瞬間から「リヴリア」は私が馬好きになって初めて夢中になった外国馬となった。家に戻ると競馬雑誌からリヴリアのことを必死に調べた。名牝タリアの仔ということ、アメリカとフランスのレースに出走し重賞を五勝しているということ、翌年から産駒が走り始めること。なぜかリヴリアに恋をしたような感覚さえ抱いた。

超良血、良績をひっさげてはるばるアメリカからやってきた期待の種牡馬の初産駒を当時の競馬雑誌ではこぞ取り上げた。馬名が登録されるたびに私のリヴリアデータ帳に記載されていく。ファンドリヴリア、ナリタタイシン、マイジョンス、ピコーアルフの社長さんだった。チカコを引き取りたいという不躰な要望に伊藤さんは穏やかな口調でこうおっしゃった。「チカコは繁殖として数年前前からうちで暮らしていましたが、体調がすぐれず結局仔は一頭もとれませんでしたが、でも、これだけ活躍してきた馬ですから家族みんなで大切にしていこうと決めたのです。せつかくのお話ですが、うちで面倒見ていくので、安心ください」。返す言葉がなかつた。チカコが幸せに暮らせるのならそれで良い。でももし万が一、チカコをやむなく手放すときは真っ先に連絡が欲しいとお願いした。伊藤さんは約束してくださった。そして、チカコにいつでも気軽に会いに来て良いよと言っていた。私のところには来なかつたけど、チカコが「イヤ、リヴリアが近くに来てくれたような気がして嬉しかった」。

それから約一年後、伊藤さんから電話をもらう。ワコーチカコを譲渡したいという申し入れだった。一生面倒を見るつもりでいたチカコをやむなく手放すことになったので私に託したいとのことだった。本意ではないはず。でもという牧場さんは生産牧場だ。繁殖が増えるので馬房が足りなくなるといふ。チカコの馬房を繁殖にあてがわなくてはならないのだ。私には断る理由がなかった。「チカコ、うちにおいで！ あなたの命は私が預かるよ！」伊藤さんとすぐに移動の話を進め、小雪がちらつく三月、チカコはローリングエッグスクラブの所有馬として牧場にやってきた。予想をはるかに超えた頭の良さでリヴリアに似たたずまい。振り向くときに白目が見えてすごみがある。でも、とても優しく落ちて着いた馬だった。「チカちゃん♪」預かってくれた下村牧場のおばさんは親しみを込めてそう呼んだ。おばさんが呼ぶとチカコは嬉しそうに目をまん丸にして近寄ってきた。可愛い馬だ。チカコ：あなたの馬生を預かったよ。何年の付き合ひになるかわからないけど、絶対に幸せな馬生にすることを約束する。チカコの姿にリヴリアの面影を重ね、私は自分

アー…。中でもお気に入りだったのが「ワコーチカコ」だった。競馬場で見た産駒たちの中で、あの鋭いまなざしが一番似ていると感じたのが彼女だった。ビデオで見たリヴリアのレース、そのスマートでとても力強い走り方も彼女はとても似ている気がした。競馬場に通いリヴリアの産駒を探しては応援馬券を買った。遠く日高にいるリヴリアへのラブレターのつもりだった。声を聴くことさえもできない寂しさは、競馬場で見ると似ているところを探すことで解消されるオタク系三十路女の拠り所だった。

年に数回日高に行つて好きな馬に会う。それは、いつしかライフワークとなり会いに行く馬はどんどん増えていった。もちろん、そのたびにリヴリアに会いに行くのだが、ある時、CBスタッドに行つてみるといつもの放牧地に彼はいなかった。必死に探すが見つからない。体調を崩して馬房に入っているのだろうか。思い切つてスタッフに尋ねてみた。「リヴリアは先月死んだんだよ」。え？ なんて？？？ リヴリアが死んだ？ リヴリアは腸ねん転で十一歳という若さで亡くなったそう。たつた五世代しか産駒を残せず、彼は天国へと駆けてしまった。翌日、牧場のスタッフに案内されリヴリアが眠る高台へ向かった。私はリヴリ

の忘れようとしていた願いを一つ叶えることができた。その日から三年半がたつた二〇一六年の暮れ、チカコは私たちの見守る中、二十六年の生涯に幕を下ろした。チカコの馬生を奪ったのは、くしくも父と同じ腸ねん転だった。臆臆とする意識の中でもチカコは最期まで倒れることなく四本の脚に目いっぱい力を込め立ち続けた。最期の瞬間、チカコはお世話になった下村さんにお辞儀をして倒れた。何という馬なのだろう。見事なほどの佇まい。リヴリアの高貴な姿そのものだった。

私はリヴリアの仔を看取つた。最高のご褒美だ。天国に旅立つたチカコの鼻づらを撫でたとき、不思議とリヴリアに触れた時と同じ感覚がした。これでリヴリアのことも本心に思い出になっていくのだ。翌日、チカコを茶毘に付し、鬣と遺影を持つていう牧場さんに向かった。たつた三年半だけチカコと過ごせた日々は本当に楽しくて幸せだったと伝えた。伊藤さんの「宮本さんが声をかけてくれて本当に良かったと思つています。お礼を言うのはこちらですよ」といふ言葉に涙があふれた。馬生を全う出来たのだから送る時は泣かないと決めている。だけど、チカコは特別だった。もつともつと傍で生きていて欲しかったという想いが涙となって溢れ止まらなかつた。

机の上にある写真を眺めるたびに天国に送つた馬たちの姿を思い浮かべる。永遠の命なんてない。でも、一日でも長く、日高の土の上で過ごさせてやりたい。それが私の馬たちにできる感謝の形だ。馬たちの生きた証を糧に私は今日も馬たちと向き合っている。いつか馬たちの命は永遠なのだ。胸を張つて言いたい。そして、馬たちとの出会いは「縁」ではなく「運命」なのだ。と誇れるように。

●受賞のことば  
イヤ〜、欲しかった!! グランプリ!!(笑)  
しかし! まだまだレースには参戦できそうなので、縁ぐだけ稼いで引退するのも良いかなあ〜と。  
あまり「泣き」の作品は書きたくなかったのですが亡きリヴリアへの想いを出しきれて満足しています。  
今回は真骨頂のスピード感のある作品でチャレンジしたいと思います。私の作品を選んでくださった皆様へ心よりお礼申し上げます。

●プロフィール  
日高で養老牧場をはじめ13年、高齢馬の扱いは慣れたもの!! 近年は家庭菜園と漬物作りに励んでいる。失敗したニンジンを受馬に与えるのが毎年の恒例行事。アチャ、ゴメンね(笑)。

